

千葉大学におけるポッドキャストによる教育研究成果の発信： 教員連携の実践例として

鈴木 宏子, 齋藤 友理, 武内 八重子
竹内 茉莉子, 岩井 愛子
中村 澄子, 米田 奈穂

抄録：千葉大学附属図書館では、2008年4月より「ポッドキャスト@千葉大図書館」を開設し、図書館案内だけでなく、教育研究成果の発信を始めている。ポッドキャスト・プログラムの企画・制作およびそれに伴う教員との連携の実践例を報告する。これらの実践例に関して、現段階での質的、量的評価をもとにして、なぜこれだけの学内の関心を獲得したかを考察し、今後の課題を整理する。

キーワード：ポッドキャスト, 音声・映像コンテンツ制作, 研究成果発信, 教員連携, リエゾン・ライブラリアン, 千葉大学附属図書館

1. はじめに

千葉大学附属図書館では、「ポッドキャスト@千葉大図書館」¹⁾を2008年4月から公開した。ポッドキャストは、ブログを利用して標準化された形式の音声や動画を配信する仕組みの1つで、ブログ上で公開するRSSを読者が設定することで、コンテンツを追加すると、その追加情報が自動的に取得されるのが大きな特徴である。多くのブログサイトやニュース配信サイトでRSSが公開され、無料で簡易なRSSソフトウェアも普及し、また、音声や動画を蓄積・再生できる容量をもった軽量安価なハードディスク、半導体メモリ、たとえばiPodや携帯電話が一般的になっていることから、送信のためのシステムとしてポッドキャストを利用することとした。これは、来館しない多くの学生へのアプローチのひとつとして学生になじみの深い音声・映像という媒体を活用し、それを常時携帯するというライフスタイルに合わせるという試みである。最初のコンテンツとして「ポッドキャスト・ライブラリー・ツアー」を企画・制作したが、その成果としてポッドキャストが図書館に来ない学生にアピールし興味を持ってもらうための手段として一定の影響を持つことを確認することができた²⁾。その後ポッドキャストの持つ可能性は、当初は予測しなかった影響を図書館から学内に与えることになり、今後の大学図書館運営にとって核心的に重要な、教員と連携した活動がさまざまな形で展開した。このことは、ポッドキャストが大学図書館活動の中で持ち得る潜在的な可能性を示唆していると考えられる。本論文においては、過去1年間に企画、制作した番組の代表的なものについてその背景、経緯、経過、特徴を中心に

教育研究情報の発信の観点から記述して、現段階でのその質的、量的評価をもとにして、なぜ学内の大きな関心を獲得するに至ったかを考察し、今後の課題を整理する。

2. リエゾン・ライブラリアン・プロジェクト・チームの発足と活動

千葉大学附属図書館では、2006年より主に教員と図書館の連携を深めることを目的として、リエゾン・ライブラリアン・プロジェクトという活動を開始した。リエゾン・ライブラリアンの役割は、分野ごとの利用者のサポートを行うという点では、サブジェクト・ライブラリアンと同様であるが、図書館を中心に考えるサブジェクト・ライブラリアンよりは、教員の教育研究の実態との密接な連携を重視し、実務的な支援を含むものであると考えられている。千葉大学附属図書館では、アメリカの大学図書館や国内の先行大学の訪問・調査を踏まえて、教員や学生と積極的にコンタクトを取りニーズを把握し提供するという「連携」を重視した千葉大学の教育研究の目的・目標に即した取り組みを行うこととした³⁾。

具体的な取り組みとして、授業と連携した「パスファインダー」(授業資料ナビゲータ(PathFinder))⁴⁾(以下、授業資料ナビ)を企画・作成した。これは、授業をテーマとした授業資料ナビを作成することにより、受講する学生の学習を支援するとともに教員の教育研究内容をよく知り、結果として使われる図書館を構築することに役立てて行こうとする意図をもっていた⁵⁾。しかし、この場合、図書館はあくまで授業の支援という役割であるため、正式なカリキュラムには規定されていない学生の学習活動や、

一般に教員の教育研究活動そのものとの連携（リエゾン）をとることはできない。このことから、ポッドキャスト・ライブラリー・ツアーを作成した経験をもとに、ポッドキャストを利用して教員との連携を進め、学生との接触機会を増加させる可能性を追求することとした。この場合、一般にいわれる「計画・実施・評価のサイクル」という方法論には従っていない。これは、ポッドキャストが持つ可能性を事前に評価することは困難であると考えたからであり、獲得済みの技能で容易に制作可能な番組からスタートして事例を積み重ねつつ、（来館しない者を含む）利用者と情報提供側の教員の反応を見ながらインタラクティブに全体像を作り上げようと考えた。

3. ポッドキャストにおける「研究を語る」の実践例

3.1. 「研究を語る」の企画

音声・映像を発信するポッドキャストは、目で「読む」情報にはない、耳で「聞く」という特徴があり、加えて、携帯音声・映像プレーヤーを使えば、いつでもどこでも視聴できるというメリットがある。そのメリットを活かし、千葉大学の優れた研究や取り組みを発信する手段として利用できると考えた。発信の対象は、同じ大学に所属しながら他学部の教員の研究内容を知らない学生、教職員、卒業生、千葉大学を目指す生徒や一般市民を想定した。千葉大学の教育研究成果の発信という点では、すでに千葉大学附属図書館は日本で最初の学術機関リポジトリ（千葉大学学術成果リポジトリ、以下、CURATOR⁶⁾）を構築して継続的に運用しており、この意味で一貫した思想に基づくとともに、この活動によって、リエゾン・ライブラリアン・プロジェクトが目指す教員との「連携」が単にリポジトリへ論文を収録するというを超えてより親密なものとなることを期待した。

3.2. 教員インタビュー「千葉大学の研究を語る」の実践例

ポッドキャスト@千葉大図書館プログラム「千葉大学の研究を語る」第1回は、2008年春に日本学士院賞を受賞した本学文学部の保坂高殿教授が、受賞対象作品である著書『ローマ帝政初期のユダヤ・キリスト教迫害』を語るという企画であった。荣誉ある賞を受賞し、世間の注目を集めているまさにそのタイミングで教員自身の言葉を伝え、その研究成果を図書館から広く発信したいという番組の趣旨を説明し依頼した。保坂教授より快く賛同を得たものの、インタビューという形式では習熟した技能を要する

ことが考えられたため、同教授に番組の想定する時間と期待する内容を伝え、内容の細部、構成そのものは教員に任せることにして、研究室を訪問し撮影を実施した。

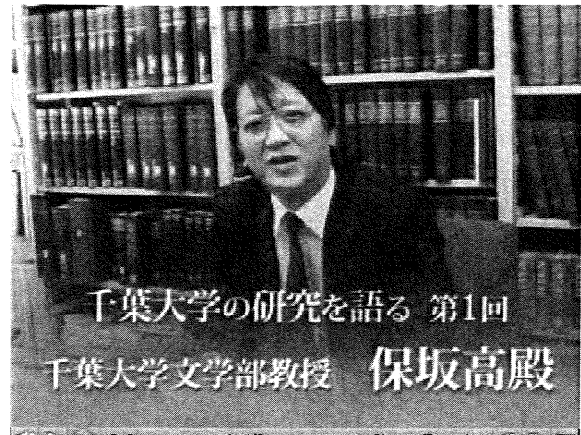


図1 千葉大学の研究を語る第1回

ビデオカメラ等使用する機材は原則としてライブラリー・ツアー番組作成に使用したものを用意した。所要時間は、視聴時間やレンタルブログサイト⁷⁾のサーバ容量を考慮し、10分程度とした。当日は、結果的に撮り直しすることも無く約10分の撮影を終えた。内容は、研究の意義や地道な研究により今までの定説が覆った経緯を中心として、歴史一般を観る目、ものの見方、学生への提言まで含むものであった。あたかも一対一で語りかけているかのような臨場感を持つ番組ができたのは、音声・動画を配信するというポッドキャストの特性の結果であると思われる。内容も濃く、文学部以外のすべての分野の学生にも、文系教員の研究をより身近に感じてもらうことができると強く期待させるものとなった。

完成したプログラムを公開する際には、教員のこれまでの業績を簡単に紹介し、著書にはOPAC該当項目へのリンクをはり、CURATOR搭載論文へもリンクすることによって、図書館サービスを総合的に提供するとともに、来館しなくても関連情報が入手できるようにした。（映像の編集過程や公開について、詳しくは4を参照のこと）。

教員自らが、研究の内容や成果を動画によってわかりやすく発信していくという試みに対しては、他の教員からも予想以上の反響があり、これ以降のプログラムに大きな影響を与えた。また、ここで紹介した学士院賞受賞作とその続編（『ローマ帝政中期の国家と教会：キリスト教迫害史研究193-311年』）は、2冊合計で2008年4月から12月の間に15

回の貸出（借用者10人）を記録した。これは本著作の極めて専門的な内容からすると非常に多くの貸出を記録したこととなる。また、同様にポッドキャスト記事で紹介されたCURATOR搭載論文についても同一著者の他論文の2倍以上のアクセスを記録している。

3.3. 展示解説の実践例

ポッドキャスト@千葉大図書館の自然な展開として、企画展示に関わるものがある。このプログラムは、図書館で開催している展示会の概要や展示資料についての解説を、企画に協力した教員が動画や音声で発信するものである。もちろん展示作品を鑑賞しながら直接解説を聞くことができれば、博物館・美術館の例を挙げるまでもなく、展示作品をより深く理解できることに疑いの余地はなく、また、ライブラリー・ツアーのノウハウを活かせることは確実であるが、展示そのものに割くべき予算と労力（時間）を考慮して、そこまで活用することは行っていない。

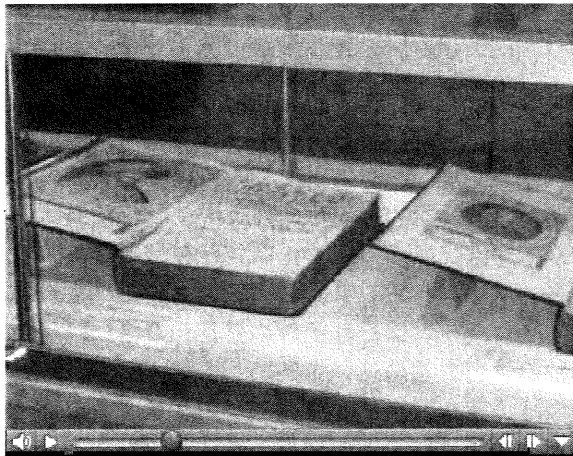


図2 図書資料に見るトルコの文化と歴史展

「展示解説」の第1回は本学文学部秋葉淳准教授の申し込みによる企画展示の解説であった。同准教授が前任の教員の資料を整理するうち、偶然にも1600年代に発行された貴重書を書庫で発見したことをきっかけとして、図書館の他の蔵書と個人蔵の資料を合わせ、文学部史学科・附属図書館共同主催として、「図書資料に見るトルコの文化と歴史展」を開催するに至った。

ここでポッドキャストを利用した意義は、たんなる新規性のある広報を行ったということにはとどまらない。定量的な評価は行えていないが、実施担当者はわかりやすさが促進されたと認識している。すなわち、キャプションや解説ポスターの掲示等の通

常の展示に加えてポッドキャストを配信することによって、きわめて専門的な歴史研究を専門外の学生にも、より興味を持ってもらえる環境整備を推進したということである。この番組の作成にあたっては、番組の最初の部分には企画者、解説者として当該教員が語りかける映像を提示し、解説部分は教員のナレーションを背景に展示品等の映像を流す形式をとった。

展示解説のプログラム作成において重要な点は、撮影、編集において必要とされる技術がより多くなったこと、展示物の権利関係についての配慮も必要になったことである。撮影では、展示品の映像と教員が出演する映像を繋げたものに音声を合わせるために、何度も撮り直しを行った。講義で話し慣れた教員にもナレーションとして原稿を読むことはなかなか難しかったようで、カメラの前に原稿を拡大コピーして用意するなどの補助が必要であった。編集過程でも、音声のみのライブラリー・ツアーや教員に進行を任せた「著書を語る」に比べて、作業と技術が多く必要とされた。また、撮影する出版物については引用、参照の範囲を超えて使用する場合もあり得たが、今回の展示の場合には見どころが1600年代発行の書籍であったため特別な著作権処理を必要とせず、十分に映像で紹介することができた。また、公開にあたっては、教員の著書や論文へのリンクだけでなく、e-bookとして閲覧できるトルコ史に関する基本文献も（学内限定ライセンスではあるが）リンクして紹介した。展示に興味をもった方がさらにもう一歩先へ進むための足がかりとしても利用してもらえるよう期待している。

3.4. 教育活動成果への展開

ポッドキャスト@千葉大図書館は、教員が研究成果を自ら語りかけるという状況設定によって、来館しない学生へのアプローチを始めた。ところが、教員との間でポッドキャストの企画を協議するなかで、当該教員が研究成果だけでなく、教育上もさまざまな取り組みを行っており、その成果を伝えたいという希望をもつことも明らかとなってきた。そこで、図書館によるポッドキャストの可能性を追求するという観点から、教育活動成果も含めるべきであると判断した。

千葉大学医学研究院小室一成教授は、他の医学部教員や学生と協力して“K project”というプロジェクトを立ち上げ、教員指導のもとで学部学生に執筆させた循環器病態生理の教科書を作成した。このユニークな取り組みは、学生自身が学生の教育に関わるという点で興味深いと考え番組企画を開始し

た。さらに打ち合わせの過程で、教授がプロジェクトの経緯などを語るだけでなく、学生にも執筆時のエピソードを語ってもらう案が採用されて、“K project”メンバーの学生にも出演してもらうこととなった。

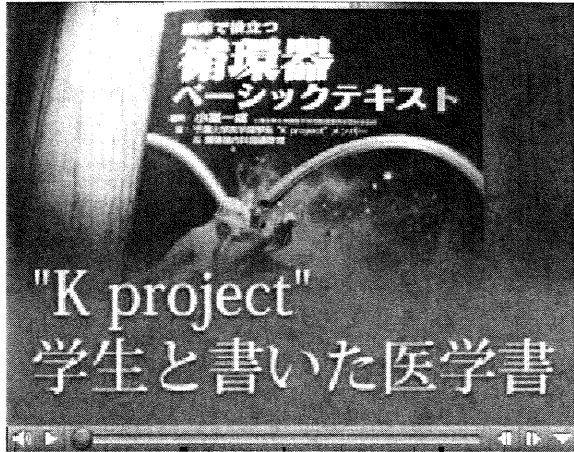


図3 教員と学生が作った教科書

ポッドキャスト配信と同時にこの教科書が配架されている書架の側面などにポスターを貼り、図書とポッドキャストの両方の存在が相互に益するように試みた。このポッドキャスト・プログラムが教員や身近な学生の活動を知ることや、非来館の学生が図書館の蔵書に興味をもって来館するきっかけになればと期待している。また、この企画を実施したことによって、ポッドキャスト@千葉大図書館の出演者が、教員だけでなく学生にも拡大したことは大きな成果といえよう。

3.5. 教員からの企画持込み

ポッドキャストの公開後、特に「千葉大学の研究を語る」の公開後は、教員対象の告知活動を強化したわけでもないにもかかわらず、教員からの問い合わせが多く寄せられた。これは、教員は他の教員の動向に興味をもっていることの表れと考えられ、また、授業資料ナビではそのようなことがなかったことから、ポッドキャストという目新しい媒体の使用が原因と考えられる。少なくとも、現象としては、教員との連携を深めるというリエゾン・ライブラリアン・プロジェクトの目的のための手段としてポッドキャストが有効であることが確認できた。問い合わせは、「映像・音声コンテンツで作りたいプログラムがあるのだが」という企画の申し出や、自身の映像・音声コンテンツ作成のための技術的な話題が多く寄せられ、映像・音声コンテンツによって自身の研究や取り組みを発信したいというニーズがある

ことがうかがえた。ポッドキャストの話題がきっかけで、CURATORや授業資料ナビの協力につながったケースもあった。いずれにせよ、教員が図書館と連携して学内コミュニティと社会に向けて発信したいと考えたという事実は特記されなければならない。

3.5.1. 教員との共同企画「新司法試験合格者インタビュー」と「新司法試験合格者講演」

現在、法科大学院を目指す学生に向けたふたつの番組を教員と協力して制作し、ポッドキャスト@千葉大図書館で公開している。この2番組は、教員から企画が持ち込まれて実現したプログラムであり、高いアクセス数を記録している。きっかけは、ポッドキャスト@千葉大図書館を見た専門法務研究科（法科大学院）の北村賢哲准教授が映像・音声コンテンツの配信に興味を持ち、平成20年度の新司法試験に合格した学生の声を、法科大学院を目指す人や法学を志す人に向けて提供したいという意向を図書館に伝えたことである。教員に番組の明確なイメージがあったことから作業分担を円滑に進めることができ、音声コンテンツの構成・制作は北村准教授が行い、ブログ記事の作成と公開・管理を図書館が行うという共同作業が実現した。

公開中のプログラムは「新司法試験合格者インタビュー（全4回）」と「新司法試験合格者講演（全4回）」のふたつである。新司法試験は法科大学院の修了が前提になるため、新司法試験を志す人は法学系の学部出身者以外も法科大学院に進学する。前者のプログラムはそれぞれの学部出身者に学部と大学院の学習方法の違いを聞いたもの、後者は学部学生向けの司法試験ガイダンスで本学法学科卒業生の司法試験合格者との座談会の様子をまとめた内容であり、他大学の大学院に進学した卒業生の話も聞くことによって千葉大学の法科大学院の特徴がわかるようなプログラムになっている。

北村准教授とはポッドキャストの配信のほかにも、蔵書の構築などでその後も協力体制が取れるようになり、教員との連携の好例となった。

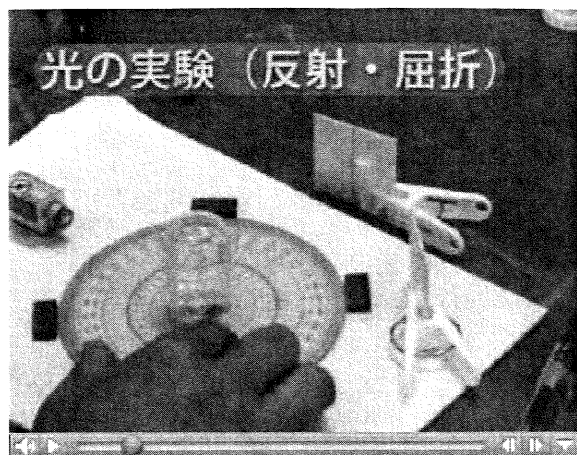


図4 特色GPの実験風景

3.5.2. 特色GPの紹介

もうひとつの教員からの申し入れにより制作した番組に、特色GP（特色ある大学教育支援プログラム）⁸⁾の紹介がある。これは、教員インタビューや展示解説のプログラムを見た教員から希望のもので、内容は「パーソナルデスクラボによる実験教育の展開（特色ある大学教育支援プログラム）」の紹介である。「パーソナルデスクラボ」とは、通常グループで行っている物理学等の実験を、一人一人の机の上で行うために開発された実験キットで、理系の学生だけでなく、文系の学生も自然科学をより身近に感じて、興味を持って学習できるように工夫された学習支援プログラムである。学生一人一人が手元で行う実験を動画で見せることができるポッドキャストは、この特色GPのプロモーションに適した媒体であった。

このプログラムは、特色GPの教員・スタッフの集団と図書館で共同制作された。映像は、特色GPスタッフより提供された動画や静止画と、授業中の風景や教員のインタビューを図書館職員が撮影したもので構成される。全体の流れとシナリオは特色GP側で作成し、図書館では提供された画像と撮影した映像を組み合わせる編集し全体のプログラムを作り上げた。このプログラムは、特色GPのWebサイトからもリンクされており、いろいろな場面で利用

したいとの要望も受けている。

4. 映像コンテンツの作成と編集

ポッドキャスト@千葉大図書館で公開中の映像コンテンツの作成手順は以下のとおりである。なお、音声コンテンツの作成手順については前出の報告を参照されたい⁹⁾。

4.1. 撮影と録音

デジタルビデオカメラおよびICレコーダにて撮影・録音を行い、展示資料など動かない対象は静止画として撮影する。機材はいずれも個人向けの製品であり、容易に取り扱うことができるものを使用する。ビデオカメラにマイクは搭載されているが、周囲の騒音を避けるため、また、並行して作成する音声コンテンツのために録音はICレコーダを併用している。

4.2. 素材の加工

動画と音声はPCへ保存し、編集に備えて、動画・静止画については明るさ・色の調整を、音声については音量の調整やノイズの低減処理を行う。また、不要な部分を大きめにカットする。

4.3. 編集と公開

あらかじめ打ち合わせて作成した構成案や音声コンテンツ用の原稿に沿い、素材を組み合わせ一本の動画にし、総時間を10分程度に収めるように内容を調整する。さらにテロップと画面効果を加え、映像コンテンツの完成とする。

編集にあたり、映像が携帯機器で視聴されることを想定して撮影対象がなるべく大きく映るよう心がけている。また、同様の理由でテロップの文字を大きめにしている。

前段で完成した映像はDVAVI形式で保存しており、公開用にはmpeg 4形式のファイルを別途作成する。その際レンタルプロダクションの仕様により、ファイルサイズを25MB以下に抑える必要があるため、圧縮品質を適宜調整する。最後に教員とチーム

表1 使用ソフトウェア

	ソフトウェア名	参照URL
音声	Audacity	http://audacity.sourceforge.net/
静止画	Picasa 2	http://picasa.google.com/
動画	Adobe Premiere Elements 4	http://www.adobe.com/jp/products/premiereel/

* Adobe Premier Elements 4は編集過程全般で使用する。また、原稿執筆現在販売されている製品はAdobe Premier Elements 7である。Picasa 2も同様にPicasa 3が公開されている。

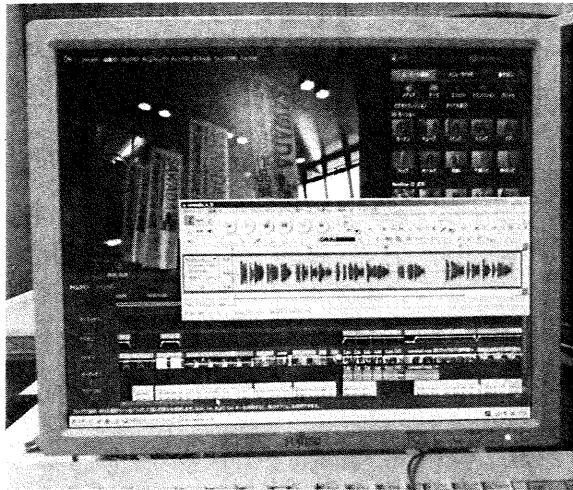


図5 編集中のPC

メンバーにより確認し、iPodでの再生テストを行う。修正点がなければ、制作過程は終了となる。

4.4. ブログ記事の編集と公開

映像・動画コンテンツを紹介するブログ記事には、図書館の情報資源へのリンクも用意している。ポッドキャスト@千葉大図書館を入口にして、興味のある文献の情報を、あるいは文献そのものをその場で手に入れることができるように図書館の情報資源へ誘導を行っているのも特徴のひとつである。学内の構成員には、図書館が用意している情報資源を知るきっかけになることを期待している。

例えば、書名のリンクをクリックすると蔵書検索結果が表示され、図書館資料に目を向けるように誘導している。また、e-bookやCURATORで利用可能な資料へのリンクを用意することで、電子的資料が一般利用者の目に触れる機会が増えることが期待され、広報の一環として機能している。この効果は、3.2で述べたとおり、図書館の貸出やCURATORへのアクセスの増加に繋がっている。

公開する前には、アクセス制限をかけたテストサイトにおいて、音声・映像、記事、リンク、写真等の確認を行い、教員にも公開の承認を得た上で、公開用のサイトで一般公開を行っている。

5. 評価と今後の課題

5.1 サイトへのアクセスからの評価

ポッドキャスト@千葉大図書館へのサイトアクセス (RSS受信回数を含む) について、レンタルサイトの運営者から提供される統計資料をもとにして考察する。レンタルサイトであるために、関心をもつ情報のすべてについて提供を受けることはできないが、この点は、サイト構築の労力とのトレードオフ

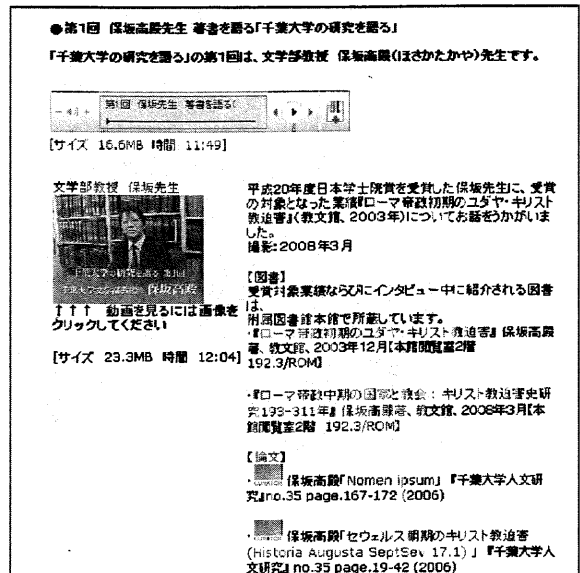


図6 ブログ記事の画面

と考えるべきであり、今後の検討課題のひとつである。また、来館しない利用者への効果を測定するという課題の特殊性により、対象集団の特定が困難であるので現段階ではアンケート調査は行っていない。

図7は、月毎のアクセス数(棒グラフ)と1日の平均アクセス数(折れ線グラフ)を示している。月合計のアクセス数をみると、毎月コンスタントに新しい番組を公開していったこともあり、7月まで順調に伸びている。8月・9月は夏休み期間ということもあり若干アクセス数が減ったが、10月にはまた上昇した。11月にアクセス数が急増しているのは、3.5.1で紹介した法科大学院関連番組へのアクセスが多かったためであるが、さらに分析すると、単純にコンテンツが増加したことだけが原因とはいえないことが示唆される。

新司法試験合格者インタビュー公開後のリンク元(ポッドキャスト@千葉大図書館にアクセスしてくる以前に訪問者が滞在していたページ)の統計をみると他のサイトを経由してポッドキャスト@千葉大図書館にきているものが増加していた。インタビューが公開されたのは11月7日であるが、プログラムを担当した教員ばかりでなく、教員と関係のある人たちが自身のサイトでこのプログラムを紹介してくれたことでアクセス数が増え、11月20日にポッドキャスト@千葉大図書館開設以降最高の701アクセス(11月の1日平均アクセス数は372であるのでその約2倍)を記録した。このときのページ別のアクセス数をみると、新司法試験合格者インタビューへのアクセスが多いのはもちろんだが、その他のプログラムへのアクセスも記録されており、新

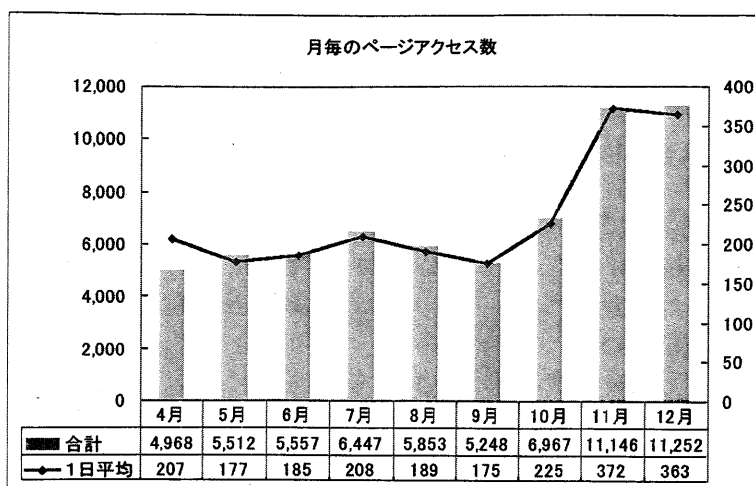


図7 月毎のページアクセス数

司法試験合格者インタビューをきっかけにして、いままで図書館に興味がなかった人にもポッドキャスト@千葉大図書館とそのプログラムを知ってもらうことができたのではないかと考えられる。教訓としては、いわゆる「キラー・コンテンツ」が重要であるということになる。

5.2 なぜ関心を呼んでいるのか

ポッドキャスト@千葉大図書館は、教員からの反応とアクセス状況の分析を考慮するならば、これまでの図書館からの情報発信活動に比べて、予想外の学内的関心を呼んでいると考えられる。この原因について考察する。

リエゾン・ライブラリアン・プロジェクトの開始以前から実施していたCURATORの場合でも、また授業資料ナビの場合でも、教員から積極的に参加を申し出ることがきわめて少なかった。しかし、ポッドキャストの場合には、むしろ教員側の負担は、前二者に比べて大きいと思われるにもかかわらず積極的な参加の申し出があり、また、企画の検討段階でも教員側からもさまざまなアイデアが提案された。

一度この番組作成で協力関係ができた教員とは、その後確実に連携を深めることができ、著作や報告書の寄贈、成果物のCURATORへの登録・公開を進めることもできている。それ以外にも、研究内容に関連するテーマに関して個別の情報提供を気軽にできるようになったことや、図書館と教員が円滑に協働してレファレンスサービスに訪れた学生の情報探索をサポートするなど、連携の効果がみられる事例は数多くある。また当該教員だけでなく、周辺の教員にもポッドキャストや図書館の活動について情報が伝わっていくことが大きな成果のひとつであ

る。

この原因は、現在の段階では推測の域を出ないが、コミュニケーションの本質に共同作業という要素があることによると考えられる。図書館と教員との接触を図書館資料のみに限って行っているときは、それぞれが「請求者」「依頼者」「管理者」「業務従事者」などの特定の役割を固定的に担うことによって効率的な図書館業務が展開される。しかし、共同で具体的な目的、すなわち番組制作、展示企画などの作業を行う場合には、それぞれが「提案者」「批判者」「実行者」「点検者」などの役割を柔軟に交替しながら作業しないと円滑な目的達成は実現できない。したがって、今回のように共同作業が必要となるような状況に置かれることによって、教員と図書館員とがさまざまな形で役割を変えながら作業を進行させざるを得なくなり、コミュニケーションが促進されることになったと推測される。このことを検証することは今後の課題である。

5.3 今後の検討課題

今後の検討課題として現在認識して、プロジェクト内で議論している事項は以下の4点である。

- (1) コンテンツ作成スキル問題
- (2) 学内連携問題
- (3) 図書館内資源配分問題
- (4) 利用実態把握問題

以下において、それぞれについて概略を述べる。

5.3.1 コンテンツ作成スキル問題

すでに述べたように、映像コンテンツの編集作成には、音声コンテンツ制作に比べて高度なスキルとより多くの時間を要する。スキルの問題は、映像コンテンツ編集に要するスキルと、映像コンテンツ配

信サーバの構築、管理、運営のためのスキルという2つの要素がある。後者のスキルに関する問題をポッドキャスト@千葉大学附属図書館では、無料レンタルサーバを利用するということによって暫定的に解決しているが、利用統計の詳細化、利用制限の複雑化（たとえば学内限定利用）に対処するためには、このままでよいかを検討対象となる。とくに、近年の図書館サービスにおけるIT化が進行している中で、大学図書館員に最低限求められる情報技術の範囲の定義との関係で検討しなければならないことは明らかである。この技術、能力が大学の管理事務においても必要となることは明らかであり、大学全体のスキル資源の問題とも関係するので、スキル問題の検討は必然的に学内連携の問題にすくなくとも部分的には帰着する。必要とする作業時間が多くなるという問題については、ポッドキャストを定常的な業務とした時に、図書館におけるこれ以外の業務とのバランスをとるという問題が生じ、したがって、図書館内におけるさまざまな資源（予算と人員）の問題にやはり関係してくることになる。

5.3.2 学内連携問題

学内連携に関しては、3つの問題がある。すなわち、大学広報との連携、情報関連施設との連携、教員所属部局との連携に関わるものである。

当然のことながら、大学の広報担当部署との連携は欠かせない。ポッドキャストは、千葉大学のホームページにはない機能であり、人目を引きやすい映像コンテンツである。また、これまで制作したコンテンツの中にも「図書館」のコンテンツとして自然ではないものも含まれている。したがって実際、大学の広報担当者も注目し情報交換を進めており、大学のプロモーションのひとつとして、教育研究を発信する部分が発展していく可能性もある。しかしその場合、図書館にこない学生へのアプローチとして着想された取り組みとしての機能が維持され得るのかを十分に吟味する必要がある。

学内への配信サービスが中心になるとすれば、学外のレンタルサーバの使用はネットワーク・トラフィックの観点からは最適ではなく、またすでに指摘したようなコンテンツのフォーマット、サイズに関する制約、利用統計の不十分さもある。また、図書館と情報関連施設との連携の重要性は、たとえば千葉大学においても、事務情報化、共同利用計算機、ネットワーク、図書館の業務を戦略的かつ効率的に展開するために情報関係部署を統合した情報部を設置していることから明らかである。図書館がポッドキャストを開始する以前より、千葉大学総合メ

ディア基盤センター¹⁰⁾ではストリーミングを利用した動画配信サーバを運用している。これは、大学の広報手段のひとつとして、講演などの映像配信、講義とパワーポイント・スライドを組み合わせたコンテンツの配信ができる機能の担い手として全学的な観点から導入された。しかし、現状ではその機能が活用されていると言い難いものに対して、図書館のポッドキャストは予想外の関心呼んだ。したがって、制作と配信のインフラを学内的に整備することになる際には、この実績上の対比を十分に評価する必要がある。この問題が千葉大学に限られる問題であるか、全国的な問題であるかは十分に調査していないが、考慮すべき論点である。

千葉大学には9つの学部があり、多岐にわたる教育と研究が行われている。さらに、普遍教育センターを設けて教養教育の実施と改善を図っている。平成20年度に、出演あるいは企画の形で協力を得た教員の所属を見ると、文学部3名、教育学部1名、医学部2名、法経学部1名、物理系教員（理学部）1名となり、工学部、園芸学部、薬学部、看護学部からは0名であるので、文系への偏り、理系学部の発信の少なさが指摘されている。来館しない学生へのアプローチということを考えるならば、理系学部が多い千葉大学においては理系学部教員によるプログラムの充実が重要な課題である。また、すべての学生が教養教育を受けるということと、すでに授業資料ナビという形で教育との連携を同じリエゾン・ライブラリアン・プロジェクトとして実現していることを考慮するならば、普遍教育センターとの連携も必要である。

5.3.3 図書館内資源配分問題

近年大学図書館を取り巻く環境が急激に変化しながらも、組織としての大学図書館はその急激な変化に柔軟に対応できているとは言えない。千葉大学においても、組織的には「係」制を廃止して、「グループ」制に変更したが、実際には、図書館の日常業務の大半は従前どおりの業務フローであるので、「プロジェクト」という位置づけで展開することによって、プロジェクト・チームのメンバーは日常業務をこなしながらポッドキャスト制作を行ってきた。当然のことながら、各メンバーの通常業務に負担のかかることもあり、予定していた番組完成が遅れることもあった。だが、プロジェクト方式では、課の壁を越えてメンバーが共同で作業に従事できるので、効率化と技術の共有が実現されており、その結果教員との連携については目に見えて成果が上がり、その実績は各方面からの協力を取り付けやすく

なった。したがって、この企画の立ち上げ期においてはプロジェクト方式によって資源問題は解決されていたといえることができる。

しかし、ポッドキャストそのものが日常業務となった時にどのような体制で臨むべきか、とくに、教員との連携には人間的関係の維持という資質の問題が関係することから、固定的な体制が最適であるかという問題も含めて検討することが課題である。

5.3.4 利用実態把握問題

5.1で述べたように、現在のレンタルブログサイトでは全体のアクセス統計と各記事へのアクセスしか掴むことができない。より詳細に実態を把握するためには、ダウンロード数やRSS購読数など、細かい統計が必要である。この対策として、他のアクセス解析ツールの利用も試みているが、長期的にはレンタルブログサイト以外の選択肢も検討する必要がある。この点については、上述のコンテンツ作成スキル問題、学内連携問題とも併せて検討する必要がある。

また、ダウンロード数やRSS購読数などのサーバで捕捉した数値的データだけでは、学生（および教員、一般市民）がコンテンツを入手したあとのように利用しているかという実態は捕捉できない。これについては、学生個人を対象としてアンケート、フォーカスインタビューなどを試みることによって、利用実態を推定することが必要であるが、すでに指摘したように、調査対象がそもそも図書館に来ない学生、ウェブにアクセスできる世界中の人々であるので方法論的な課題は多い。しかし、その本来の調査対象への調査により、ポッドキャストに限らず学生の大学における生活学習パターンや行動、図書館に期待することしないことが見えてくることも期待できる。

5.4. 課題解決への糸口

以上の4つの課題は、その本格的解決のためには今後の検討を待つべきものであるが、若干の方向性を得つつあるのでその概略を述べる。そもそも、ポッドキャストの画期的な特徴は、大袈裟なシステム構築を必要とするものと考えられてきた動画配信という発信方法をウェブの世界で一気に簡便化したことである。すなわち、使用するソフト自体はプロ仕様ではなく個人用のものであるため、メンバーが相互に研修を重ねていけば、このスキルの習得は容易である。加えて、このようなスキルは、現代の情報環境では、一部の専門家が独占するものではなく、大学の教員、卒業生ならば身に付けていて

当然のものである。実際、例えば3.5.1のプログラムでは、専門法務研究科の教員がコンテンツ作成部分を担当し、図書館はポッドキャスト・サイトに公開する作業だけを行ったので負担が大幅に軽減されている。つまり、図書館職員であれ、学生であれ教員であれ、発信したい人が自分で作り、このポッドキャスト・サイトから発信していくという形がスムーズな運営の鍵となると考えられる。

さらに、コンテンツの制作に学生という人材資源を活用することも考えられる。これによりプロジェクトメンバーの業務負担が減るだけでなく、学生の情報処理スキル向上という教育目標にも合致し、さらに彼らのフレッシュなアイデアを活用することもコンテンツの品質向上にはプラスになることが予想される。また、授業資料ナビと同様に、授業と連携した（さらに授業資料ナビと連動した）ポッドキャスト・プログラムも想定できるだろう。さらに、業務にかかる時間とコストの分析と認識をきちんと行えば、組織としての大学図書館の体制や業務フローを見直すきっかけにもなることが期待される。

6. おわりに

以上において、平成20年度に千葉大学附属図書館で実施したポッドキャスト@千葉大図書館の経緯、経過およびその評価とそれに基づく今後の課題の検討について報告した。この経験を通じ、ポッドキャストという手段により情報発信の可視性が高まったことを実感している。また、この試みを大学図書館が行うことの意義は、機関リポジトリの思想と同じく、大学図書館は情報を収集するだけでなく、機関の教育研究成果を発信し利用に供するという役割を担いつつあるということである。そのために重要なことは、学内との相互理解と連携協力であり、その意味でも今回の経験はひとつのステップであったと考えている。ポッドキャストによる情報の発信は、国内の大学図書館としては初めての試みでもあるので、今後どのような技術の発展や問題がでてくるかは現段階では不透明な部分もあるが、同時に、来館しない学生への働きかけ、教員との連携強化を通じた図書館活動の学内的認知度の向上という所期の目的は達成されつつあるので、今後もさらなる認知度向上の可能性も十分に大きい。

謝辞

本論文の執筆は、上司、同僚の理解と激励を得たことによって可能になった。また、公表されていない番組制作の経緯、経過についても本文中に名前を挙げて報告することをお許しいただいた保坂教授、

表2 今までの制作プログラム一覧 (2009.1現在)

カテゴリー	プログラム	制作・出演・協力	公開日	音声	動画	上映時間 (合計タイム)	ファイル数
図書館情報	ライブラリー・ツアー	学生 (モニター) ・図書館 (制作, ナレーション, モニター)	2008.4	○		23分	18
	ライブラリー・イントロダクション (日本語)	図書館 (制作, ナレーション)	2008.4	○		8分	4
	ライブラリー・イントロダクション (英語)	留学生 (ナレーション), 図書館 (制作)	2008.4	○		8分	4
	ライブラリー・イントロダクション (中国語)	留学生 (中国語訳, ナレーション), 図書館 (制作)	2008.4	○		7分	4
	ライブラリー・イントロダクション (韓国語)	留学生 (韓国語訳, ナレーション), 図書館 (制作)	2008.4	○		6分	4
	図書館Q&A	学生・図書館 (制作, ナレーション)	2008.4	○		9分	10
	図書館ガイダンス	図書館 (制作, ナレーション)	2008.10	○		20分	4
千葉大学の研究を語る	学士院賞受賞作を語る	文学部教員 (出演), 図書館 (制作)	2008.5	○	○	12分	1
	「図書資料に見るトルコの文化と歴史展」解説	文学部教員 (出演・解説), 図書館 (制作)	2008.6	○	○	5分	1
	「源氏物語絵巻展」解説	教育学部・文学部教員 (出演・解説), 図書館 (制作)	2008.7	○		10分	2
	教員と学生が作った教科書を語る	医学部教員, 医学部学生 (出演), 図書館 (制作)	2008.9	○	○	9分	1
展示紹介	「澤田重隆油彩作品展」紹介	図書館 (制作, ナレーション)	2008.10	○	○	2分	1
	「千葉市の医学と医療展」解説	医学部教員 (出演), 図書館 (制作)	2008.11	○	○	8分	1
千葉大学の教育	司法試験合格者インタビュー	専門法務研究科学生 (出演), 教員 (制作・出演)	2008.11	○		21分	4
	司法試験合格者講演	法学科卒業生 (出演), 教員 (制作・出演)	2008.12	○		29分	4
	特色GPパーソナルデスクラボ紹介	特色GP教員 (理学部, 教育学部等) (企画・出演・映像提供), 図書館 (制作, ナレーション)	2009.1	○	○	7分	1

秋葉准教授, 小室教授, 北村准教授に感謝する。また, プロジェクト・チーム外の職員およびライブラリー・イノベーション・センター・フェローからの多くの有益なコメントに感謝する。併せて, ポッドキャスト・プログラム制作に協力をいただいたすべての教職員・学生にも感謝を述べたい。

注

- 1) ポッドキャスト@千葉大図書館 <http://libcast-chibau.seesaa.net/> (accessed 2009-1-28)
- 2) 鈴木宏子, 米田奈穂, 岩井愛子, 中村澄子, 斎藤

友理「「ポッドキャスト@千葉大図書館」の構築: ポッドキャストによる図書館セルフガイドの作成」
情報の科学と技術 Vol.59, No.1, 2009, p.34-40.

- 3) 金山亮子, 武内八重子「日本におけるリエゾン・ライブラリアン千葉大学附属図書館の挑戦」
専門図書館 no.222, 2006, p.15-20. (online) available from http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/irwg5/liaison_librarian.pdf (accessed 2009-1-28)
- 4) 授業資料ナビゲータ (PathFinder) <http://www.ll.chiba-u.ac.jp/pathfinder/> (accessed 2009-1-28)
- 5) 鈴木宏子, 武内八重子, 中村澄子「図書館による学習支援と教員の連携: 千葉大学におけるパス

- ファインダー作成の実践から」大学図書館研究 83号, 2008, p.19-24.
- 6) 千葉大学学術成果リポジトリ CURATOR <http://mitizane.ll.chiba-u.jp/curator/> (accessed 2009-1-28)
- 7) 前掲2, p.35
- 8) 「特色ある大学教育支援プログラム (特色GP)」文部科学省 http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/tokushoku/shien.htm (accessed 2009-1-28)
- 9) 前掲2, p.36
- 10) 千葉大学総合メディア基盤センター <http://www.imit.chiba-u.ac.jp/> (accessed 2009-1-28)
-
- <2009.2.6 受理 すずき ひろこ, さいとう ゆり, たけうち やえこ, たけうち まりこ, いわい あいこ, なかむら すみこ, よねだ なほ 千葉大学情報部 (附属図書館) リエゾン・ライブラリアン・プロジェクト・チーム>

SUZUKI Hiroko, SAITO Yuri, TAKEUCHI Yaeko, TAKEUCHI Mariko, IWAI Aiko, NAKAMURA Sumiko, YONEDA Naho

Dissemination of education and research accomplishments from Chiba University by way of podcasting: A good practice of library-faculty collaboration

Abstract: Chiba University Library began offering Podcasts @ Chiba University Library in April 2008, and extended the programs to include the dissemination of education and research accomplishments. This paper reports on the planning and production of the podcast programs and examples of how these were done in cooperation with faculty. The authors consider why the podcasts have gained so much popularity on campus, based on the quality and quantity of work done to this point, raise some issues for future consideration and conclude with a few tentative solutions.

Keywords: podcasts / creating audio-visual content / disseminating research accomplishments / collaboration with faculty / liaison librarians / Chiba University Library